

# 自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 13, No. 3

神奈川県立生命の星・地球博物館

Sept., 2007



## 祝・通巻50号!

いしはまさえこ  
石浜佐栄子 (学芸員)

「自然科学のとびら」は、おかげさまで通巻50号を迎えました。今号の表紙は、これまで発行してきた49号分の表紙を飾った写真を一挙に並べてみました(左上の第1号から、右に向かって横に順番に、右下が49号)。あなたは、どの写真がお気に入りですか?

この「自然科学のとびら」は、普段みなさんの目に触れないような内容も含め、博物館のさまざまな活動を紹介して

きました。今号は、当館で今まさに進行中の調査研究や資料の収集、教育普及などの活動を、トピックス的に紹介します。また、これまでに掲載してきた記事の総タイトルをまとめて再掲載します。博物館の活動をより良く知り、また、過去に掲載された写真や記事にもう一度興味を持つことで、あなた自身の「自然科学に対する『とびら』」を開いていただければ幸いです。

今号は50号記念として、当館の将来への展望と、今まさに進行している6つの活動について紹介します。

博物館が博物館でありつづけるために

さいとうやすじ  
斎藤靖二（館長）

だれもが親しく楽しむことのできる博物館や美術館は、「集める」・「調べる」・「伝える」という地味な仕事で支えられています。このことは博物館や美術館が生まれたときから変わっておりませんし、これからも変わることはないでしょう。集められるものには、自然からの標本資料や考古資料や人類がつくってきた美術・工芸品（コレクション）、および文書記録（アーカイブ）があります。しかし、それらは無目的にむやみに集められているわけではありません。私たちが、どこからきて、どこへ行こうとしているのか、そんな私たちの記憶と歴史を実証しながらより良い未来を目指して、それぞれの館が独自の目標を設定して蒐集の努力を続けています。

コレクションもアーカイブも、どれをとっても人類が共有する貴重な財産です。それらはさらに発見が期待される研究素材ですから、将来にわたって伝えていく必要があることはいうまでもありません。このような仕事を社会的に分担できる場所は、博物館や美術館のほかにはありません。私たち皆のコレクションがいかに大事であるかは「伝える」活動である展示からうかがい知ることができます。展示は、博物館や美術館でなければできない独特の表現手法ですから、魅力を伝えて感動してもらうためにいろいろ工夫がこらされます。

生命の星・地球博物館は、自然と人間がともに調和して生きていくことをテーマに活動している自然史博物館です。皆さんが自然に親しむ手がかりとなるように、常設展示では、初期地球のころにはじまり、生命の誕生から発展していく歴史、現在の生物がいかに多様性に富むかまで、地球生命史の流れがわかるように展開されています。膨大な標本類の一部は、個別の分類あるいは話題ごとに、実物百科事典のようなジャンボブック展示に活用されています。そして、学芸員による総合研究や経常研究の成果は、特別展または企画展として公開されています。今年の特別展は「ナウマンゾウがいた！～温暖期の神奈川～」(7月21日～11月4日)で、藤沢市から産出した化石にもとづいて、約13万年前の温暖期を中心に展示がなされています。2年前には

「+2℃の世界～縄文時代に見る地球温暖化～」と題する企画展もなされており、神奈川県から得られた資料から、地球規模の環境変動が読みとれることを紹介してきております。ぜひご覧になって下さい。

どの分野の特別展または企画展でも、何年にもわたる資料の蒐集蓄積とそれらの調査研究によって裏づけられています。しかし、毎日続けられている職員の裏方作業は見えませんが、一般に十分に理解されているわけではありません。とはいえ標本資料を継続的に蒐集することは、実はとても重要なことを教えてください。2002年から2005年にかけてなされた総合研究の成果をまとめて、昨年「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」を刊行しました。それは、ほぼ10年前に刊行したときの報告書と比べてみると、県内から多くの野生生物が絶滅していること、さらにいくつもの生物が消失するおそれがあることを明らかにしています。博物館活動は、国も機関も場所も関係なく、だれでも参加して協力連携して進めることができるのが特徴ですが、この報告書も館独自の研究成果に加えて、外部の多くの研究や団体に協力していただいでできたものです。調査研究への協力にはじまり、資料の標本化や整理、情報化といった作業、そして普及活動など、博物館活動はボランティアと友の会による多岐にわたる活動によって支えられています。私たちは、自然・生物との共生になんらかの役割を果たすことを望みながら、途切れることのない記録をとり続けていきたいと思っています。

しかし、楽しい博物館も運営についてはいまや冬の時代といわれています。社会的な不景気の影響を受け

て、維持運営するのが困難になっているからです。博物館活動にも市場原理主義を導入して、行政・経済の効率化をはかろうとする動きがあります。そこでは、経費削減、人材有効活用といいいながらの人員削減、職員の意識改革、受益者負担などの検討がせまられています。しかし目的は経費削減ですから、管理が行き届かないことからおこる不十分な安全対策、施設設備の老朽化、サービスの質的低下といった問題がでていることも確かです。入札による指定管理者制度では、長期的な展望・計画をもてないままに収益事業が重視される傾向があり、本来の博物館活動を支える土台が軽視されて、人類がこれまで蓄積してきた文化や伝統が消失するおそれがあると心配されています。また、現在進められている公益法人改革や博物館法の改正にともなって、博物館の収益事業と公益性なども検討されています。公益性のない博物館なんてあるはずがないと思うのですが。

未来を担う子どもたちに、私たちはどんな博物館を残したらよいのでしょうか。やはりボランティアや友の会および多くの協力者とともに、「集める」・「調べる」・「伝える」という仕事ができる博物館ではないのでしょうか。博物館が博物館であり続けるためには、そのどれも欠くことができません。博物館は、そんな地味な活動のまわりに、たくさんの方たちが集まってくる楽しい場でありたいと願っています。



図1 ボランティアによる展示解説。

## 館外の研究者やボランティアと協働した箱根火山の調査研究

やましたひろゆき  
山下浩之 (学芸員)

1950年代に久野久氏によって確立された箱根火山の形成史は、半世紀にわたり不動のものとなってきました。しかし、科学技術の進歩や、林道整備による新露頭の出現により、この数年で新モデルが提唱されました。それは、旧モデルでは箱根火山初期にあたる50～25万年前に2,700mにも達する巨大な成層火山を形成したと考えたのに対して、新モデルでは巨大な成層火山ではなく、中～小規模の成層火山を複数形成したというものです。もちろん、新モデルは箱根火山の初期だけではなく、後の活動についても山体形成史からテクトニクスまで、新知見で展開されています。

このような流れの中で、箱根火山の入口に位置する当館としては、箱根火山形成史の新モデルを紹介・普及することは義務とも考えられます。しかし、私の専門は岩石学で、火山はあまり得意とするところではありません。そこで、当館に隣接する温泉地学研究所の火山学を専門とする職員にも加わっていただき、新モ

デルをさらに研究するためのプロジェクトを立ち上げました(ちなみに火山学が専門の笠間学芸員が異動してきたのは立ち上げ後です)。これが総合研究「箱根火山」です。この総合研究を立ち上げるにあたり、参加する研究者全員に最初から調査研究報告書のタイトルを提示しました。例えば、「須雲川安山岩類の岩石学的特徴」や「箱根新期カルデラの形成について」などです。今年度発行される調査研究報告書には、新モデルに加えて、各々の報告がなされると思います。

今回の総合研究の中で触れておきたいのが、ボランティアとの協働です(図1)。先述のとおり、新モデルでは巨大な成層火山ではなく、中～小規模の成層火山を複数形成したことになっています。そこでボランティアと協同で各火山体の石を採集し、岩石プレパラート

を作成したり、全岩化学分析を行なったりにして基礎データの収集を行ないました。

現在、総合研究「箱根火山」の研究期間は終了し、調査研究報告書を作成しています。来年(2008年)の夏には、これらの成果を公表する特別展が開催されます。特別展では研究成果の公表に加えて、公開実験等も計画しています。箱根火山に興味をお持ちの方、是非とも、来年の夏に特別展示室でお会いしましょう。



図1 博物館学芸ボランティアによる地形模型の色塗り作業。これから真っ白の地形模型に、最新の地質図を描いていきます。

## 神奈川県レッドデータ生物調査の本来の目的に向けて

たかくまさとし  
高桑正敏 (学芸員)

とくに戦後、私たちの営みが急速に変わってきた中で、多くの野生生物が衰亡し、地域絶滅するようになりました。たとえば、かつてはふつうに見かけたキキョウ(図1)やメダカ、オオミズスマシですら、神奈川県では絶滅寸前の危機にあります。そのような事態に、現在を生きる私たちは無関心でよいのでしょうか?

当館では、こうした危機的な状況にある種(レッドデータ生物)を把握するため、

多くの研究者の協力をいただき、全国にさがかけて県内を調査してきました。調査結果は、最初は1995年に、次に2006年に衰亡原因とともに報告書(レッドデータブック)にまとめましたが、専門的な限られた部数の報告書だけでは、県民の多くの方々にこうした危機的な状況を知っていただけません。そこで、1995年版では特別展を開催するとともに図録(普及解説書)を発行し、また新聞に連載

記事掲載していただくなどの普及啓発活動を行いました。一方、2006年版ではいろいろな事情から特別展の開催ができなかったため、民間活力を頼って一般の方向への普及書の出版を計画しているところです。

そもそも、レッドデータ生物の研究目的

は、たんにその階級別リストを発表し、あるいはレッドデータブックとしてその衰亡の様子や原因を記すだけではないはず。本来は、そうした種類が地域から衰亡・絶滅することを防ぐためであり、そのためのリスト作成のほうです。衰亡・絶滅回避には、一部の研究者や関係者だけでなく、しばしば一般の方々との絶大な理解と支援が不可欠です。ですから、まず多くの県民の方々に野生生物の現状と保護の重要性を十分に知っていただく必要があり、前述の普及書が計画されました。出版はまだちょっと先ですが、従来にない企画が盛り込まれていることでもあり、ぜひ多くの方々に読んでいただき、レッドデータ生物の衰亡・絶滅回避のために理解を得たいと願っています。

当館ではその使命に、神奈川県を中心とした博物館活動とともに、「社会的な貢献」をめざすことをうたっています。調査研究の成果をもとに、社会に対して指導的な役割を果たすとともに、実現に向けてアクションを起こしていきたいものです。



図1 県内からほとんど姿を消したキキョウ。

## ティラノサウルス科<sup>かぞくけいかく</sup>属<sup>か</sup>計画<sup>けいかく</sup>！？

おおしまつはる  
大島光春（学芸員）

博物館資料の多くは、学芸員による採集や一般の方々からの寄贈によって充実していきます。しかし、私が担当している恐竜のような大型の脊椎動物化石については、ほとんどの資料を購入しています。限られた予算を、もっとも有効に使うため、収集資料を充実させるために、学芸員は作戦を立てます。とはいえ、実物の化石はいつでも市場に流通しているというものではないため、レプリカを購入するなど臨機応変な対処が要求されます。

今、遂行中の作戦はCPFT (Collection Plan of the Family Tyrannosauridae)。ティラノサウルス科<sup>か</sup>家族計画<sup>けいかく</sup>ではなくてティラノサウルス科<sup>か</sup> (収集) 計画<sup>けいかく</sup>です。恐竜の中でも特に人気があり、博物館の収集活動として賛同を得やすいというのも理由の一つですが、研究活動が活発に行われている分類群であることが最大の理由です。

動物分類学上、ティラノサウルスというの<sup>ぞく</sup>は属 (Genus) の名称で、有名な *T. rex* (ティラノサウルス) はその中の1種です。科には1つ以上の属が含まれ、ティラノ

サウルス科の場合、ティラノサウルス属の他、アルバートサウルス属、タルボサウルス属、ダスプレトサウルス属が含まれます (注)。

当館ではこれまでにティラノサウルスの全身骨格と頭骨 (共に複製)、アルバートサウルスの頭骨 (複製) と歯 (実物)、タルボサウルスの頭骨 (複製)、ダスプレトサウルスの歯 (実物) を収集してきました。つまりティラノサウルス科のすべての属がそろいました。

ダスプレトサウルスの頭骨や、すべて種の歯をそろえるまでCPFT ステージ1は続きますが、CPFT ステージ2として展示計画を始動します。

【注】分類は、研究する学者によって異なることがあります。ティラノサウルスのなかまでは、例えば、  
*Tarbosaurus* = *Tyrannosaurus* Carpenter, 1992  
*Gorgosaurus* ≠ *Albertosaurus* Curry, 2003  
*Gorgosaurus* = *Albertosaurus* Russell, 1970  
*Nanotyrannus* = *Gorgosaurus* Gilmore, 1946  
*Nanotyrannus* = *T. rex* の若い個体 Carpenter, 1992 とする意見・見解などがあります。



図1 アルバートサウルスの頭骨。



図2 タルボサウルスの頭骨。

## 収蔵システムのデータを世界に発信 - GBIF へのデータ提供 -

ひろたにひろこ  
広谷浩子（学芸員）

開館当初から整備されてきた情報システムのうち、主軸をなす収蔵システムは、当館が所蔵する資料のデータベースです。現在18分野約35万件の標本データが登録されています。このデータベースは一部を除き、これまで館内での閲覧しかできませんでしたが、GBIFの事業への参加を通し、今年度より広く一般の方々に公開されることとなりました。

GBIF (地球規模生物多様性情報機構)



図1 整理を待つ哺乳類標本たちは、心なしか所在なげなようです。

による1事業として、2005年国立科学博物館を中心に自然史標本データベース=サイエンス・ネットが構築されました。すでに登録館は31団体、標本データ数は約86万件にもなっています。これにより全国の博物館からさまざまな情報が提供されるとともに、生物系の標本について日本全体の横断検索ができるようになりました。たとえば、「ツキノワグマ」と検索すると、ツキノワグマ標本を持つすべての館の標本データが出てくるというものです。これらのデータは、GBIFにも提供されていますので、地球規模での標本データ検索にも入ってきます。

神奈川県内では、当館も含めて6つの博物館が集まり、神奈川県委員会をたちあげ、合計3万件の標本データを提供しまし

た。GBIFの事業をきっかけに、県内の博物館相互の交流も活性化されることを期待しています。今年度は、GBIFの宣伝をかねて、標本情報の公開をテーマとした巡回展示を企画中です。

提供するデータは、エクセル等の表計算ソフトで簡単にまとめられていれば、加工して共通の形式にすることは容易です。当館の場合も、収蔵システムにすでに入力されているデータを加工するだけでしたので、比較的簡単な作業だったと思います。

収蔵システムの調整担当者として憂えるのは、標本データの整備や標本整理の重要性・緊急性についての認識の甘さです。「いつか暇になった時に」と思っていると、標本情報が担当者の記憶の奥底に沈んでしまったり、標本と情報のリンクが切れたりする危険性は非常に高いと思います。GBIFの事業が、誰でもいつでも参照できる形に標本を整理するという博物館の重要な仕事に有効活用されるならば、とてもすばらしいと思います。

もっとも厳しい講座？「神奈川トンボ調査隊」の活動：年間講座の試みから

かるべはるき  
荻部治紀（学芸員）

昆虫担当学芸員として、開館以来同僚の高桑学芸員とともに「昆虫採集入門」など、様々な講座を試行してきましたが、気になった点があります。それは、昆虫に興味があり、講座の時には一生懸命がんばる、でも普段は調査も採集もしない、という方が多いことでした。意外と期待していた「虫にはまって抜け出せなかった」ような方は少なかったのです。

それならばいっそのこと、調査もまとめも



図1 池の中で調査中の小学生隊員。

専門家なみにやってもら講座を開催したらどうなるのだろう、という試行がこの「神奈川トンボ調査隊」でした。この講座では、さまざまなスキルを上げるために、年4～5回の共通の野外実習も行いますが、基本は、「自分で決めた調査地で、自力で調査し、調査結果をまとめて報告する」というものです。やることは、研究者と一緒にですで大変です。しかも、参加者は昆虫に興味はあるけど、こういう調査は初めて、という方がほとんどでした。初回の講座でトンボ採集のグッズや、標本の作り方などを実習し、以降はそれぞれのフィールドでのがんばり次第です。つまり、自分が調査に行かなければ実績はあがらず、まとめようにもネタがないわけです。もちろん、毎回の講座で、さまざまな種の生態や探し方などの調査法は学べますし、メールを活用して、普段からいろいろなトンボ情

報を流すようにもしてみました。

参加者の方々も、最初とはまどいも多かったと思いますが、徐々に勘所がつかめてきたようで、「〇〇で××サナエをとりました！」のようなニュースが入るようになりました。夏には、それまでの採集品を持ってきてもらって、顕微鏡と検索表を使って種類を調べる個人授業もしました（\*事前に自分で名前はつけてくる）。最初は同定間違いもありましたが、こうした体験からどんどん知識も増えていったと思います。冬には、一年間で積み上げた調査結果をしっかりとめて皆の前で発表していただき、最後にはレポート提出までであったという、下手な大学の授業より厳しい？ハードな講座でした。

この講座は2年目に入り、より多くの経験を身につけたみなさんは、いろいろな新発見もしています。今度は、専門の雑誌への投稿が次のステップです。一緒に県内のトンボの調査をしていく頼もしい仲間が増えたこと、参加者の方はちょっとしたサポートでどんどん成長していくこと、僕にとっても楽しい一年でした。

来館者や学芸員とのコミュニケーションにより発展する展示解説

さとうたけひろ  
佐藤武宏（学芸員）

当館では、2002年度から、展示解説ボランティア制度を設け、来館者に対する解説や、質問への対応などを行なっています。現在、約50名の方がボランティアとして登録し、年間（開館日数は約300日）のべ約400名の方が展示解説を実施しています。

展示解説のために、館が用意した簡単なマニュアルもあるのですが、それよりも、ボランティアの皆さんには、自分の興味のある分野について、自分の言葉で解説するように、お願いしています。なぜなら、ボランティア一人ひとりが、自分の好きなこと、自分が学んでわくわくしたことについて、自分なりに来館者に伝えてくれるほうが、生き活きたメッセージとして来館者に伝わると考えているからです。

展示解説をしていると、たまたま展示を見ていた専門家や、理科の教員などに遭遇し、より詳しい知識を逆に得ることもあります。また、一般の来館者から、解りにくい専門用語や言い回しについて指摘を受けることがあります。時には、標

本の産地にまつわるエピソードや、その場所を旅行で訪れたときの体験談を聞くこともあります。こうして、来館者とのコミュニケーションによって、展示解説は日々発展をしています。

一方、館では年に数度、ボランティアを対象に、学芸員による展示解説ミニレクチャーや、特別展展示解説（図1）などを実施し、展示物やその学術的背景についてより深く知ってもらう機会を設けています。また、ボランティアの連絡ノートを用いて、資料に関する質問を随時受け付け、学芸員はそれに対して、回答と、解説や参考資料の紹介を行なっています。これらの質問や、関連する情報、特別展や展示替えに関する情報などは、毎月1回、定期連絡によってボランティアに届けられます。学芸員とのコミュニケーションも、展示

解説の発展の動力になっています。

展示解説ボランティアに登録すると、学ぶ楽しさと伝える喜びの両方を満たすことができるうえ、館からの情報をより多く受けとることができ、館を最大限に活用するヘビーユーザーになることができる、というメリットがあります。学芸ボランティアや友の会会員を含め、多くの方が展示解説ボランティアに登録して下さることを期待しています。



図1 ボランティアを対象とした学芸員による特別展の展示解説。

自然科学のとびら 1～50号 総タイトル

これまでに掲載された記事の総タイトルを、以下に再掲載します。バックナンバーは、当館のライブラリーをはじめ、神奈川県内の中学校や高校、図書館、博物館、行政施設等で閲覧することができます。また、当館のホームページにも掲載しています。興味のある記事を見つけたら、ぜひバックナンバーを手にとって、また新たな『自然科学の『とびら』』を開いてみてください。

- Vol.1, No.1 June, 1995 (通巻 1号)
・表紙「ニホンジカ」(中村一恵)
・「発刊にあたって」(濱田隆士)
・「新しい博物館をめざすもの - 活動の抱負」植物グループ (木場英久)
動物グループ (高桑正敏)
地球環境グループ (平田大二)
古生物グループ (樽 創)
・ミュージアム・ライブラリと博物館情報システム (勝山輝男)

- Vol.1, No.2 Sept. 1995 (通巻 2号)
・表紙「オオムラサキ」(高桑正敏)
・「神奈川県にゆかりの深いチョウ類とその関連資料」(猪又敏男)
・「コノハチョウは木の葉に擬態しているのか? - タテハチョウ類の生存戦略を考える -」(高桑正敏)
・「海に浮かぶ地球のまど」(山下浩之)
・「巻貝のかたち」(佐藤武宏)

- Vol.1, No.3 Dec. 1995 (通巻 3号)
・表紙「メコンプンス・ホリデューラ」(木場英久)
・「展示技法の事柄などから・・・」(森山哲和)
・「朝鮮民主主義人民共和国の地質調査報告記」(平田大二)
・「ネパールヒマラヤの植物調査隊に参加して」(木場英久)
・「博物館実習を終えて」(博物館実習生)
・「ジブティ共和国大統領 生命の星・地球博物館を訪問」

- Vol.2, No.1 Mar. 1996 (通巻 4号)
・表紙「およそ 250 万年前のサル化石 コロブス亜科の頭蓋骨」(広谷浩子)
・「中津層から日本最古のサル化石を発見して」(小泉明裕)
・「中津層のサルがいた時代」(長谷川善和)
・「初公開 神奈川県指定天然記念物『中津層群神沢層産出の脊椎動物化石』について」(松島義章)
・「列島の火山」(小出良幸)

- Vol.2, No.2 May. 1996 (通巻 5号)
・表紙「クロサギ (黒色型)」(中村一恵)
・学芸員研究ノート「サルの群れの『父子関係』」(広谷浩子)
・「北アメリカ東部の博物館をたずねて」(大島光春)
・「博物館情報システム Q&A」(鈴木智明)
・「海底の化石 - オフィオライト -」(小出良幸・新井秀一)
・神奈川の自然シリーズ1「丹沢の化石サンゴ礁」(門田真人)
・ライブラリー通信「マラコフィラテリーって何だ?」(土屋定夫)
・新収資料紹介「カーティスのボタニカル・マガジン」(木場英久)

- Vol.2, No.3 Aug. 1996 (通巻 6号)
・表紙「ヒナチドリ」(勝山輝男)
・学芸員研究ノート「酒匂川上流のリップルマーク」(今永 勇)
・「生命の星・地球博物館のボランティア」(田中徳久)
・「神奈川県自然の危機を告げるレッドデータ生物」(浜口哲一)
・神奈川の自然シリーズ2「相模湾の魚類相 - 研究の現状と今後」(瀬能 宏)
・ライブラリー通信「フェアブルあれこれ」(土屋定夫)
・新収資料紹介「ダイヤモンド」(山下浩之)

- Vol.2, No.4 Nov. 1996 (通巻 7号)
・「1994年の神奈川」(新井田秀一)
・学芸員研究ノート「照葉樹林を舞うミナミヤンマ」(苅部治紀)
・「神奈川県植物誌の改訂」(勝山輝男)
・「ミュージアムライブラリーについて」(土屋定夫)
・博物館実習を終えて (平成8年度博物館実習生)
・神奈川の自然シリーズ3「箱根のコケ」(生出智哉)
・ライブラリー通信「博物画家の伝記」(土屋定夫)
・新収資料紹介「櫻井コレクションの魅力へ地質時代を彩る化石標本」(松島義章)

- Vol.3, No.1 Feb. 1997 (通巻 8号)
・表紙「曹長石」(平田大二)
・学芸員研究ノート「化石動物群」(樽 創)
・「櫻井欽一博士とその足跡 - 出逢いと運命 -」(濱田隆士)

- ・「特別展で展示される櫻井欽目標本の内容」(加藤 昭)
・神奈川の自然シリーズ4「岩石の宝庫 - 酒匂川」(山下浩之)
・ライブラリー通信「困った時の櫻井文庫」(土屋定夫)
・新収資料紹介「オオカミの頭骨」(中村一恵)

- Vol.3, No.2 May. 1997 (通巻 9号)
・表紙「アカバナヒメワカガミ (イワウメ科)」(勝山輝男)
・研究ノート「地球の大地を作る岩石 - 花崗岩 -」(小出良幸)
・友の会ができました! - ライブ博物館をつくりましょう - (濱田隆士)
・「平成7年度及び8年度に実施した来観者動向基礎調査分析結果からの考察」(奥野花代子・佐渡友陽一)
・神奈川の自然シリーズ5「大磯海岸の貝化石」(田口公則)
・ライブラリー通信「人魚の涙」(土屋定夫)
・新収資料紹介「マルガタワガタ類」(苅部治紀)

- Vol.3, No.3 Aug. 1997 (通巻 10号)
・表紙「ポプロフオネウスとディニクティス」(樽 創)
・学芸員研究ノート「ニホンオオカミはなぜ小さいのか」(中村一恵)
・「博物館とインターネット」(鈴木智明)
・「城ヶ島が『島』でなくなる日〜巨大地震と地殻の変動〜」(平野 聡)
・神奈川の自然シリーズ6「ニホンザル」(広谷浩子)
・ライブラリー通信「人類はまた、ヘルポップに逢えるのか」(土屋定夫)
・新収資料紹介「斜長岩とエクログナイト」(平田大二)

- Vol.3, No.4 Nov. 1997 (通巻 11号)
・表紙「城ヶ島」(平田大二)
・研究ノート「中国内蒙古自治区の生物調査隊に参加して」(木場英久)
・「カキの生活と進化 - 岩礁性生物が泥底で生きる知恵 -」(鎮西清高)
・「ヒルゲンドルフと神奈川県」日本の魚学・水産学事始め - フランツ・ヒルゲンドルフ展 -」に上せて」(矢島道子)
・神奈川の自然シリーズ7「入生田のきのこ」(生出智哉)
・ライブラリー通信「レッドデータブックにさよならを」(土屋定夫)
・資料紹介「古瀬コレクション〜古瀬義氏採集植物標本〜」(勝山輝男・高橋秀男)

- Vol.4, No.1 Mar. 1998 (通巻 12号)
・表紙「ラブカ (カグラザメ目ラブカ科)」(瀬能 宏)
・研究ノート「岩石の化学組成を調べる」(川手新一)
・「ユニバーサル・ミュージアムをめざして」(3周年記念実行委員会)
・「『多様な新世界の住人たち』より - アリの巻 -」(小林秀司)
・神奈川の自然シリーズ8「三浦の名がついたミウラニシキガイ」(田口公則)
・ライブラリー通信「オキナエビスの笑顔」(土屋定夫)
・資料紹介「動物遺体の収集」(大島光春)

- Vol.4, No.2 May. 1998 (通巻 13号)
・表紙「大草原の大きな湿地」(木場英久)
・研究ノート「魚学史 - 日本の魚を研究した人たち」(瀬能 宏)
・「日本最初の本格的な水産学徒 - 内村鑑三」(影山昇)
・神奈川の自然シリーズ9「神奈川の植物群落」(田中徳久)
・ライブラリー通信「植物学と植物画」(内田 潔)
・資料紹介「地球観測衛星ランドサットと地図のデジタルデータ」(新井田秀一)

- Vol.4, No.3 Sept. 1998 (通巻 14号)
・表紙「二宮層とそれを切る断層」(田口公則)
・研究ノート「不思議なカビの恋愛事情」(出川洋介)
・「3月に発見されたミヤマクワガタを考える」(高桑正敏)
・「カラバチア山脈のオオカミとイノシシ」(神崎伸夫)
・神奈川の自然シリーズ10「神奈川県西部の活断層と地震」(松田時彦)
・ライブラリー通信「雑草を知るための本」(内田 潔)
・資料紹介「ニホンジカの頭骨標本の収集と利用」(広谷 彰)

- Vol.4, No.4 Dec. 1998 (通巻 15号)
・表紙「火山豆石」(平田大二)
・研究ノート「空飛ぶ動物のつばさ」(大島光春)
・「南アフリカのダイヤモンド鉱山巡り」(山下浩之)
・「牛糞由来の腐化植物」(勝山輝男)
・神奈川の自然シリーズ11「小さなモグラ・ヒメミズは何処へ」(山口佳秀)
・ライブラリー通信「注目される企業博物館」(内田 潔)
・資料紹介「小田原コレクション - 小田原利光博士収集のカニ標本 -」(村岡健作)

- Vol.5, No.1 Mar. 1999 (通巻 16号)
・表紙「メダカ」(瀬能 宏)
・研究ノート「ツメタガいの殻とせせん」(佐藤武宏)
・「素晴らしい箱根の自然」(蛭子貞二)
・「太古の地球への旅 - 西オーストラリアの地質調査 -」(小出良幸)

- ・ライブラリー通信「桜」(内田 潔)
・資料紹介「正宗敏敬博士・福山伯明博士により記載されたラン科植物のタイプ標本」(勝山輝男)

- Vol.5, No.2 June, 1999 (通巻 17号)
・表紙「ヘリコーマ属 (カビ) の一種」(出川洋介)
・研究ノート「地下水の利用と保全 - 有機塩素系化合物による地下水の汚染と対策 -」(長瀬和雄)
・「より自然なトンボ池づくりのために - トンボ池の功罪、水草にご注意 -」(苅部治紀)
・「神奈川の自然シリーズ12 神奈川の腐生ラン」(勝山輝男)
・ライブラリー通信「里山」(内田 潔)
・資料紹介「地層のはざ取り資料」(田口公則)

- Vol.5, No.3 Aug. 1999 (通巻 18号)
・表紙「ゴホンツノカブトムシ」(苅部治紀)
・「昆虫の脚はなぜ6本か? 翅はなぜ4枚か?」(東城幸治)
・「神奈川県地震の観測と研究」(横山尚秀)
・「学習指導員の仕事」(学習指導員)
・ライブラリー通信「谷戸・谷津」(内田 潔)
・新収資料紹介「モロッコとロシアの三葉虫」(田口公則)

- Vol.5, No.4 Nov. 1999 (通巻 19号)
・表紙「珪化木アラウカリオキシロン」(大島光春)
・「昭和天皇の自己実現と生物学研究へ支えた知的探求心と旺盛な気力」(影山昇)
・「高校1年生の博物館への意識 - 関心度調査」(奥野花代子・永野文子)
・「オーストラリアの地質調査」(山下浩之)
・ライブラリー通信「迫 (さこ)」(内田 潔)
・資料紹介「酒井恒博土画・カニ類の原色細密画」(佐藤武宏)

- Vol.6, No.1 Mar. 2000 (通巻 20号)
・表紙「イレズミンニャクアジ」(瀬能 宏)
・研究ノート「美しさを隠したカミキリムシ」(高桑正敏)
・展示シリーズ1「カワウ」(中村一恵)
・神奈川の自然シリーズ13「神奈川のモリアオガエル」(新井一政)
・「博物館は宝の山!〜博物館資料の活用〜」(開館5周年記念事業実行委員会)
・ライブラリー通信「自然誌と自然史その1」(内田 潔)
・資料紹介「澤田コレクション - 澤田武太郎氏収集の書籍と植物さく葉標本 -」(田中徳久)

- Vol.6, No.2 June. 2000 (通巻 21号)
・表紙「ニホンザルの新生児」(広谷浩子)
・「霊長類の行動と進化」(長谷川眞理子)
・「博物館における新しい科学教育の可能性を求めて」(小出良幸)
・展示シリーズ2「ストロモトライト - 酸素大発生を謎を解く石 -」(平田大二)
・神奈川の自然シリーズ14「今、小田原のメダカが危ない - 善意?の放流と遺伝子汚染」(瀬能 宏)
・ライブラリー通信「自然誌と自然史その2」(内田 潔)
・資料紹介「ソウの歯〜標本の身上調査は慎重に〜」(樽 創)

- Vol.6, No.3 Sept. 2000 (通巻 22号)
・表紙「ササラダニ - どこにでもいる善良なダニ -」(青木淳一)
・「おおらかなマメ科の複製」(木場英久)
・「切手が語る魚類の世界」(功川欣三)
・展示シリーズ3「マッコウクジラ」(山口佳秀)
・「でるかな!? 三葉虫〜特別展プログラム・化石ジュエル割り体験〜」(田口公則)
・神奈川の自然シリーズ15「江ノ島の海食地形」(今永 勇)
・ライブラリー通信「ダーウィンブームの予感」(内田 潔)
・資料紹介「落合変形菌類コレクション」(出川洋介)

- Vol.6, No.4 Dec. 2000 (通巻 23号)
・表紙「南極海のアホドリ」(中村一恵)
・研究ノート「マンガルの巨大なカニと貝」(佐藤武宏)
・「チリを歩けば火山にある - 太平洋の向こう側、南米チリの火山の様子 -」(平田大二)
・展示シリーズ4「エドモントサウルス」(大島光春)
・「博物館の観察会も進化する? - 2つの自然観察会から考えたこと -」(広谷浩子)
・ライブラリー通信「ピトロープの流行」(内田 潔)
・資料紹介「昆虫タイプ標本 - 世界の共有財産 -」(苅部治紀)

- Vol.7, No.1 Mar. 2001 (通巻 24号)
・表紙「愛川町で発見されたイトアメンボ」(高桑正敏)
・「ヤマトシジミ - 河川漁業を支える汽水生物の現状 -」(根本隆夫)
・展示シリーズ5「大空を舞う種子、ハネフクベ」(田中徳久)
・神奈川の自然シリーズ16「半円越え地学ハイキング」(田口公則)
・「博物館は知識の百貨店 - 菌類班でのボランティア活動 -」(沢田美美子)

- ・ライブラリー通信『ウムウシ』本 (内田 潔)
- ・資料紹介「グリーンランドの岩石」(山下浩之)

**Vol.7, No.2 June.2001 (通巻 25号)**

- ・表紙「神奈川を代表する植物」(田中徳久)
- ・『神奈川県植物誌2001』の分布図から分かること(田中徳久)
- ・「ナベツル〜冬の到来を告げる黒いツル〜」(加藤ゆき)
- ・展示シリーズ6「マッコウクジラの骨格標本」(山口佳秀)
- ・「忘れえぬ3人の外来研究員」(出川洋介)
- ・ライブラリー通信「ケンベル」(内田 潔)
- ・資料紹介「20万分の1ランドサット地図」(新井田秀一)

**Vol.7, No.3 Sept.2001 (通巻 26号)**

- ・表紙「桂林、景勝なり」(小出良幸)
- ・「擬蜂虫〜ハチを見たらハチでないとと思え〜(1)」(高桑正敏)
- ・「環境指標としてのタンポポとササラダニ」(加藤利奈)
- ・展示シリーズ7「草の化石ではありません-コマチアイト-」(山下浩之)
- ・「高校生が感じた県立生命の星・地球博物館」(関口康弘)
- ・ライブラリー通信「ケンベルとバーニー」(内田 潔)
- ・資料紹介「ムカシオオホシゴザメ」(樽 創)

**Vol.7, No.4 Dec.2001 (通巻 27号)**

- ・表紙「カンガルー・ポー」(田中徳久)
- ・「恐竜のかたちと暮らし」(大塚則久)
- ・「ブラックバス問題-最近の動向、そしてこれから必要なことは?-(瀬能 宏)
- ・展示シリーズ8「イネ科植物の歴史」(木場英久)
- ・ライブラリー通信「凶鑑の元祖」(内田 潔)
- ・「特別展『地球を見る』のポスター」(新井田秀一・田口公則)

**Vol.8, No.1 Mar.2002 (通巻 28号)**

- ・表紙「スズメバチにそっくりなコシアカスカシバ」(高桑正敏)
- ・「擬蜂虫〜ハチを見たらハチでないとと思え(2)」(高桑正敏)
- ・「恐竜が描かれるまで」(小田 隆)
- ・「ニホンザルがムササビを襲う」(頭本昭夫・広谷浩子)
- ・ライブラリー通信「モースの『臨海実験所』跡地を巡る謎」(内田 潔)
- ・「恐竜手づくりプロジェクト」(田口公則・大島光春)

**Vol.8, No.2 Jun.2002 (通巻 29号)**

- ・「カリナンダイヤモンド(複製)」(山下浩之)
- ・「ブラックバスによるトンボ類の被害」(古澤博之)
- ・「渡り鳥はどこからどこへ? -鳥類の標識調査-」(加藤ゆき)
- ・「特別展『人と大地と-Wonderful Earth-』開催にあたって」(平田大二)
- ・ライブラリー通信「『月刊むし』が揃いました」(篠崎淑子)
- ・「地学W杯〜ジャンボブックピックス展示の紹介〜」(山下浩之)

**Vol.8, No.3 Sept.2002 (通巻 30号)**

- ・表紙『『夢虫』オオトラカミキリ』(高桑正敏)
- ・「小笠原の固有昆虫は今」(苅部治紀)
- ・「本州唯一のナベツル越冬地『山口県熊毛町八代』-人とツルの新たな共生をめざして-」(清水利宏)
- ・「秋の鳴く虫-コオロギとキリギリスはどこが違う?」(中原直子)
- ・ライブラリー通信「レバンの蝶」(篠崎淑子)
- ・展示シリーズ9「アンモナイトの壁をじっくり見よう」(田口公則)

**Vol.8, No.4 Dec.2002 (通巻 31号)**

- ・表紙「イモリ」(丸野内淳介)
- ・「謎の菌類の『謎』を解明! -箱根から再発見された謎の菌類、エニグマトミクス-」(出川洋介)
- ・「神奈川県立生命の星・地球博物館における大型魚類標本の搬入と保管」(瀬能 宏)
- ・「特別展『ザ・シャーク〜サメの進化と適応・ケースコレクションより〜』」(樽 創)
- ・ライブラリー通信「1971年の『SCIENCE』を探せ」(篠崎淑子)
- ・資料紹介「チゴハヤブサの剥製」(加藤ゆき)

**Vol.9, No.1 Mar.2003 (通巻 32号)**

- ・表紙「ラブルベニア属(カビ)の一種-昆虫体表に生きる究極の菌類-」(出川洋介)
- ・「細胞性粘菌という不思議な生き物」(川上新一)
- ・「神奈川の哺乳類凶鑑-野生動物が大好きな、あなたへの一冊-」(中村一恵)
- ・「フジの花の半回転」(木場英久)
- ・「神奈川の自然シリーズ17「波の下のギリギリのバランス」」(佐藤武宏)
- ・ライブラリー通信「レファレンスの話」(篠崎淑子)
- ・資料紹介「山水の世界に自然の不思議さを楽しむ-水石-」(平田大二)

**Vol.9, No.2 June.2003 (通巻 33号)**

- ・表紙「サラサヤンマ」(苅部治紀)
- ・「擬態虫-ハチを見たらハチでないとと思え-(3)」(高桑正敏)
- ・「私たち、中国から来ました-森林性移入鳥類の現状-」(川上和人)
- ・「移入種点描 ニュージーランドの場合」(田中徳久)
- ・ライブラリー通信「レッドデータブック」(篠崎淑子)
- ・「宙瞰図 鳥を越えた視点」(新井田秀一)

**Vol.9, No.3 Sept.2003 (通巻 34号)**

- ・表紙「セイタカダイオウ(タデ科)」(勝山輝男)
- ・「オガサワラオオコウモリを次の世代に残す」(稲葉 慎)
- ・「シッキム・ヒマラヤの植物調査」(勝山輝男)
- ・展示シリーズ10「恐竜の足跡の壁」(大島光春)
- ・ライブラリー通信「横浜の植物」(篠崎淑子)
- ・「箱根神山3テフラおよび始良-丹沢テフラの剥ぎ取り標本」(山下浩之)

**Vol.9, No.4 Dec.2003 (通巻 35号)**

- ・表紙「丹沢空撮」(田中徳久)
- ・「フィリピンで箱根を考える」(萬年一剛)
- ・研究ノート「アジアの大豆発酵食品」(出川洋介)
- ・「博物館と行動観察-もうひとつの評価法-」(広谷浩子)
- ・ライブラリー通信「丹沢を楽しむ」(篠崎淑子)
- ・資料紹介「サンタナ層の化石」(大島光春)

**Vol.10, No.1 Mar.2004 (通巻 36号)**

- ・表紙「ジャイアント・コーズウェイ(巨人伝説を生んだ柱状節理)」(平田大二)
- ・「擬蜂虫〜ハチを見たらハチでないとと思え(4)」(高桑正敏)
- ・「ヒマラヤの植物から学んだこと」(木場英久)
- ・ライブラリー通信「貝の本」(篠崎淑子)
- ・「神奈川の自然シリーズ18「化石の古さ(小柴層のアケボノウウ)」」(樽 創)

**Vol.10, No.2 Jun.2004 (通巻 37号)**

- ・表紙「カンテンダコ」(佐藤武宏)
- ・「丹沢山地とスイスアルプス」(今永 勇)
- ・「豆博士達の大活躍!」(出川洋介)
- ・展示シリーズ11「ヒマラヤの”リップルマークの壁”」(田口公則)
- ・ライブラリー通信「ロクショウガサレキって何?」(篠崎淑子)
- ・展示シリーズ12「クジラつり(マッコウクジラの骨格)」(大島光春)

**Vol.10, No.3 Sept.2004 (通巻 38号)**

- ・表紙「カシカガエル」(新井一政)
- ・「火砕流のL・M・S」(笠間友博)
- ・「魚類写真資料データベース-市民との協働で築かれた研究ツール-」(瀬能 宏)
- ・ライブラリー通信「Bonin Islands」(篠崎淑子)
- ・「雲南の植物」(田中徳久)

**Vol.10, No.4 Dec.2004 (通巻 39号)**

- ・表紙「キマダラヒリアシキバチ(キバチ科)」(高桑正敏)
- ・展示シリーズ13「展示室に流れる、見えない水の話」(平田大二)
- ・「展示にもうひとつ味プラスしたら」(広谷浩子)
- ・展示シリーズ14「最小のネズミ『カヤネズミ』」(山口佳秀)
- ・ライブラリー通信「地震に備える」(篠崎淑子)
- ・「企画展の“かながわくん”から考える『+2℃の世界』から『-CO<sub>2</sub>の世界』へ」(田口公則)

**Vol.11, No.1 Mar.2005 (通巻 40号)**

- ・表紙「蔵王の樹氷」(大島光春)
- ・「博物館と大学」(青木淳一)
- ・「丹沢の異変と再生」(勝山輝男)
- ・「博物館にまつわる数字」(大島光春)
- ・展示シリーズ15「ジャンボブック展示トピックスコーナー」(山下浩之)
- ・ライブラリー通信「子どもの本」(篠崎淑子)
- ・資料紹介「オオタカ」(加藤ゆき)

**Vol.11, No.2 Jun.2005 (通巻 41号)**

- ・表紙「ホトケドジョウ(部分白化個体)」(荒尾一樹・瀬能 宏)
- ・「風化火山灰のふしぎな世界」(笠間友博)
- ・「礫の付着生物に見られる生き残るための工夫」(佐藤武宏)
- ・展示シリーズ16「森の開拓者・霊長類の食虫類」(山口佳秀)
- ・ライブラリー通信「カーチスの植物雑誌」(篠崎淑子)
- ・「ポスター・とびろデザイン人気投票」(樽 創)

**Vol.11, No.3 Sept.2005 (通巻 42号)**

- ・表紙「黒いアクトンボ 青いアクトンボ」(苅部治紀)
- ・展示シリーズ17「化石コレクターな地層-ブンデンパンハ産化石動物群-」(石浜佐栄子)

- ・「鳥類のレファレンスから思うこと」(加藤ゆき)
- ・「神奈川の自然シリーズ18「草原の保全」」(田中徳久)
- ・ライブラリー通信「骨を読む」(篠崎淑子)
- ・「特別展「化石どうぶつ園」での新しい試み」(大島光春)

**Vol.11, No.4 Dec.2005 (通巻 43号)**

- ・表紙「ビジャリカ(Villarica)火山山頂火口」(萬年一剛)
- ・「魚類資料の整理-ステップ化とコード化によるボランティア参加の実現-」(瀬能 宏)
- ・「多彩に展開される“ミュージアム・リレー”第100走を迎えて」(奥野花代子)
- ・「アケティブな火山に登る」(萬年一剛)
- ・ライブラリー通信「宝石・貴金属大事典」(篠崎淑子)
- ・「東丹沢にあるロマンの緑石〜石ころの探究活動〜」(田口公則)

**Vol.12, No.1 Mar.2006 (通巻 44号)**

- ・表紙「スポロディニエラ・ウンベラータ」(出川洋介)
- ・「灯台下暗し〜知らされていない博物館対岸の山〜」(山下浩之)
- ・「宇宙から見た三浦半島」(新井田秀一)
- ・「神奈川の自然シリーズ19「人生田のカエル」」(新井一政)
- ・ライブラリー通信「しほばらをつくらう」(篠崎淑子)
- ・「まぼろしのカビとの再開-昆虫に生える珍しいカビ-」(出川洋介)

**Vol.12, No.2 Jun.2006 (通巻 45号)**

- ・表紙「ナカムラギンメとオカムラギンメ」(瀬能 宏)
- ・「ちよとした時間に野鳥を楽しむ」(加藤ゆき)
- ・「ふしぎな生きもの 菌類〜動物?植物?それとも?〜」(出川洋介)
- ・展示シリーズ18「砂漠に咲く花〜デザート・ローズ〜」(平田大二)
- ・ライブラリー通信「コケの魅力」(篠崎淑子)
- ・「愛らしいゴキブリたち」(高桑正敏)

**Vol.12, No.3 Sept.2006 (通巻 46号)**

- ・表紙「海水を飲みに来るアオオト」(加藤ゆき)
- ・「“The present is the key to the past”-過去の謎を現在から解き明かす-」(石浜佐栄子)
- ・「2005年のスタンディングから」(樽 創)
- ・ライブラリー通信「美しき菌類」(篠崎淑子)
- ・「中国科学院昆明動物研究所の昆明動物博物館を訪ねて」(松島義章)

**Vol.12, No.4 Dec.2006 (通巻 47号)**

- ・表紙「展示室で虹色を楽しむ」(田口公則)
- ・「チャートという岩石」(齋藤靖二)
- ・展示シリーズ19「食虫目アズマモグラ」(山口佳秀)
- ・「色と形から見る『につぼん』『パノラマにつぼん』を楽しむために」(新井田秀一)
- ・ライブラリー通信「玉虫厨子のタマムシ」(篠崎淑子)
- ・「哺乳類標本ができるまで」(広谷浩子)

**Vol.13, No.1 Mar.2007 (通巻 48号)**

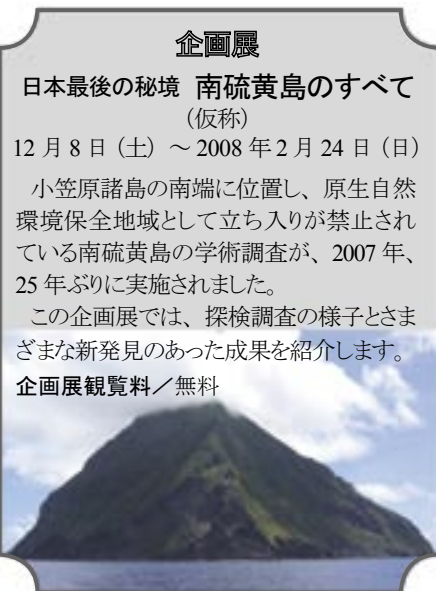
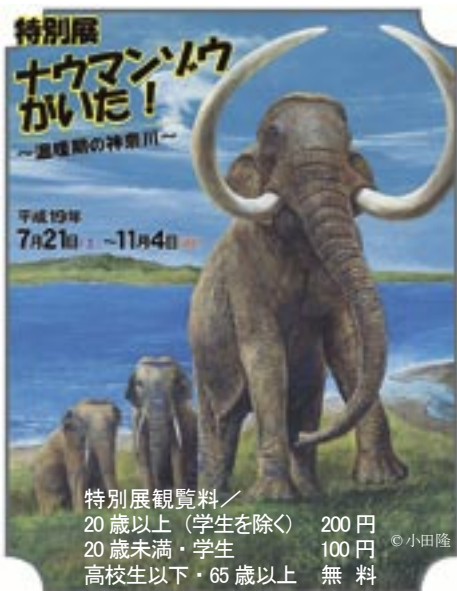
- ・表紙「おしべが花卉になる桜」(木場英久)
- ・「昆虫担当芸芸員と昆虫の保全活動」(苅部治紀)
- ・「砂と腐油で楽しむ火山づくり」(笠間友博)
- ・ライブラリー通信「パノラマにつぼんが終わっても」(篠崎淑子)
- ・「南アルプスの高山植物が消える?」(勝山輝男)

**Vol.13, No.2 Jun.2007 (通巻 49号)**

- ・表紙「漢翠山」(田中徳久)
- ・「標準和名とは? 差別的語を含む鳥類の標準和名の改名をめぐる」(瀬能 宏)
- ・「特別展 ナウマンゾウがいた! ~温暖期の神奈川への紹介」(樽 創)
- ・ライブラリー通信「ライブラリーの図書・雑誌検索スタート!」(篠崎淑子)
- ・「身近なツボカビを観察しよう-カエルの感染症で話題となった菌類の素顔-」(出川洋介)

**Vol.13, No.3 Sept.2007 (通巻 50号)**

- ・表紙「祝・通巻50号!」(石浜佐栄子)
- ・「博物館が博物館でありつづけるために」(齋藤靖二)
- ・「館外の研究者やボランティアと協働した箱根火山の調査研究」(山下浩之)
- ・「神奈川県レッドデータ生物調査の本来の目的に向けて」(高桑正敏)
- ・「テトラサウルス科属計画!」(大島光春)
- ・「収蔵システムのデータを世界に発信-GBIFへのデータ提供」(広谷浩子)
- ・「もつとも厳しい講座?「神奈川トンボ調査隊」の活動:年間講座の試みから」(苅部治紀)
- ・「来館者や学芸員とのコミュニケーションにより発展する展示解説」(佐藤武宏)
- ・ライブラリー通信「世界の切手展〜ライブラリーに送られてきた郵便物の切手〜」(篠崎淑子)



**催し物のご案内**

- 野外観察「身近な自然発見講座」[博物館周辺]  
日時／①10月10日②11月14日③12月12日(いずれも水) 各日10:00～15:00  
対象／どなたでも(人数制限なし)  
事前申込不要、当日博物館集合。雨天中止
- 野外観察「菌類観察会」[丹沢湖ビジターセンター]  
日時／10月20日(土)10:30～15:00  
対象／小学生～高校生と保護者 25人  
申込締切／10月2日(火) 消印有効
- 野外観察「海岸の石ころ探検隊」[①酒匂川河口②二宮海岸③博物館]  
日時／①10月21日(日)②11月25日(日)③1月13日(日) 各日10:00～15:00  
対象／小学生～中学生と教員各回20人  
申込締切／①10月2日(火)②11月6日(火)③12月25日(火) 消印有効
- 野外観察「秋の地形地質観察会」[大磯丘陵]  
日時／11月3日(土・祝)10:00～15:00  
対象／小学4年生～大人40人  
申込締切／10月16日(火) 消印有効
- 野外観察「動物ウォッチング」[博物館とその周辺]  
日時／11月10日(土)10:00～15:00  
対象／小学4年生～大学生15人  
申込締切／10月23日(火) 消印有効
- 室内実習「化石クリーニング教室」[博物館]  
日時／11月18日(日)13:00～15:30  
対象／小学生～大人20人  
申込締切／10月30日(火) 消印有効
- 室内実習「岩石プレパラートを作ろう」[博物館]  
日時／12月1日(土)・2日(日)の2日間10:00～15:00  
対象／小学4年生～大人10人  
申込締切／11月13日(火) 消印有効
- 室内実習「ダイバーのための魚類学講座」[博物館]  
日時／①12月9日(日)・16日(日)の2日間 ②1月20日(日)・27日(日)の2日間 各日9:30～16:00  
対象／中学生～大人各回10人  
申込締切／①11月20日(火)②1月4日(金) 消印有効
- 野外観察「冬の樹木観察」[湯河原町池峯]  
日時／1月19日(土)10:00～15:00  
対象／小学4年生～大人24人  
申込締切／1月4日(金) 消印有効

ライブラリー通信

**世界の切手展 ～ライブラリーに送られてきた郵便物の切手～**

篠崎淑子(司書)

ライブラリー通信は、2巻2号から始まりました。私が担当になったのは8巻2号からなので、今回で22回目になります。自然科学のとびらは年4回発行のため、3ヶ月ごとに来る締め切りにずいぶん苦しみました。今回は、私がこのライブラリーに来てから6年、ずっと暖め続けてきた企画についてご紹介します。

ライブラリーには、寄贈や交換で、図書や雑誌が世界中から送られてきます。送られてきた封筒を見てみると、その国ならではの美しい切手が貼ってあります。それらの切手は、捨ててしまうには惜しくて何となく取っておいたのですが、前任者から数えるといつの間にか集め始めて10年がたちました。いつか世界の切手展のようなものを作って、切手とともにライブラリーの仕事も紹介できたらと思っていましたが、今回、ライブラリー入口のミニ企画展示コーナーで紹介する機会を得ました。一般の人はあまり目にするのではないと思い、切手が貼ってある封筒や、実際に送られてきた雑誌も展示してみました。

切手は主に自然科学に関するものをテーマに展示しました。また絶滅したゾウや、カタツムリ、魚など珍しい生物の切手には、その分野の学芸員からコメントをいただきました。チェコや中国から送られてきた切手には美しい鳥のデザインが多いのですが、中国のものは学名が書かれていないので、これも学芸員に調べていただきました。

中国の切手には、鳥以外の、たとえばワニやクロテン、トラなどには学名が書いてあって、調べてみるとどれも絶滅の危機に瀕している生物でした。ドイツのカタツムリも絶滅の危機に瀕している生物のようです。もしかしたら世界各国で環境保護を訴えるような切手が出されているのかもしれない。日本でもそのような切手が出ているのでしょうか。もし知っている方がいましたら教えてください。



ライブラリー入口で、10/21まで展示予定です。

**催し物への参加について**

右記の催し物の受講料は無料です。ただし、野外観察や実習作業を伴う講座は傷害保険(1人・1日50円)への加入をお願いします。  
また、申込締切が記してあるものは、事前に申込が必要です。応募多数の場合は抽選となります。参加方法及び各行事の詳細については、右記までお問合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

**問合せ先**

神奈川県立生命の星・地球博物館  
企画情報部企画普及課  
所在地 〒250-0031 小田原市入生田499  
電話 0465-21-1515  
ホームページ <http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

自然科学のとびら

第13巻3号(通巻50号)

2007年9月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館  
館長 斎藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 石浜佐栄子

印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2007 by Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

